キズナエピソード

槍水りり　２話

//カフェ

カラオケボックスでのやり取りがきっかけとなり、

俺は時々りりと遊ぶようになった。

向こうから誘われることもあれば、こちらから誘う場合もある。

グループで遊んだ次の日に、

また2人きりで遊ぶようなこともあった。

//次ページ

今日のメンバーは3人

俺とりり、りりの友達のマリアンヌ。

ファーストフード店に集まって、

とりとめもないことをだべって過ごしていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［とびお］

「え！　マリアンヌさんもあのマンガ好きなの!?」

［マリアンヌ］

「も、もちろん！

あれは僕のバイブルっス！」

［りり］

「やばやば～、意外な共通点じゃ～ん！」

［マリアンヌ］

「デュフフ。

これはとある筋から手に入れた話っスが、

今度、劇場化するらしいっスよ」

［とびお］

「マジで!? うわー、楽しみだわ」

［りり］

「おもしろそー！

始まったら、みんなで見に行こーよ！」

［マリアンヌ］

「ぜしぜし！

こんな風に話せる友達ができて、テラ嬉しいっス！」

［りり］

「じゃあアタシ、予習しとかないとだねー。

アタシだけ読んでないんだもん。

ってことでマリ夫～、貸してよ～！」

［マリアンヌ］

「もちろんっスよ！

こんな事もあろうかと、

1巻は布教用にいつも持ち歩いているので……」

［とびお］

マリアンヌがカバンに手を突っ込んで、

ゴソゴソと中を探りはじめる。

しかし、そこでマリアンヌの顔色が変わった。

［マリアンヌ］

「あ、あれ？　あれ？　……あぁっ！

1巻、学校に置いてきちゃったっス……。

取りに戻らねば……！」

［りり］

「そうなの？

じゃ、アタシも一緒にいくよ！」

［マリアンヌ］

「いやいやいやいや、僕一人で大丈夫っス。

どうせなら、全巻まとめて渡すんで、

とびお氏がよければまた一緒に話しましょう。デュフフ」

［とびお］

マリアンヌはペコペコお辞儀をしながら帰っていく。

そして、俺はりりと二人きりになった。

［とびお］

氷が溶けて薄まったコーラをズズっとすする。

ふと、りりがニヤニヤと笑っていることに気づいた。

［りり］

「どうどう？　マリ夫、いい子でしょ？」

［とびお］

「そうだな。

漫画とかゲームとか結構知ってて、話があうかな」

［りり］

「でしょでしょ！

じゃあさ、どうよ？」

［とびお］

「どうよ……ってどういうことよ？」

［りり］

「だからぁ……マリ夫のこと、どうよ？

あの子と付き合っちゃわない？

アタシがサポートするよ～」

［とびお］

「ぶはっ！

おいおい、急にどうしたんだよ！」

［りり］

「え、別にー？

マリ夫があんなに男の子と話すの珍しいし、

とびおとならお似合いだなって思っただけだよ？」

［りり］

「気が合うんでしょ？　いいじゃん！

最高じゃん！」

［とびお］

「それとコレとは話が違うだろ」

［りり］

「えー。何が違うのさ。

とびお、彼女いなかったよね？」

［とびお］

「そりゃいないけど……。

それを言うなら、お前だって彼氏いないだろ」

［りり］

「えー、なになに～？

もしかして、とびおの本命ってアタシなの～？」

［とびお］

「いや、そういう話じゃなくて！」

［りり］

「あ、違うの。なんだ～。

ま、アタシは彼氏とかいらないから。

狙っても意味ないけど！」

［とびお］

「え、そうなの？

でも前に彼氏いたって言ってなかった？」

［りり］

「そりゃ、告られれば別に付き合うこともあったし、

恋愛漫画も好きだけど……。

それだけだよね」

［りり］

「だって……なんか男ってバカじゃん？」

［とびお］

「男に面と向かって言うなよ」

［りり］

「いやいや、とびおのことは好きだよ。

じゃなきゃ、マリ夫のこと薦めたりしないって！」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

そう言って、りりは楽しそうに笑った。

「だから、それとこれとは別だっての」

俺もつられて、笑って返す。

けれど、俺の胸はなぜだかチクリと、痛んでいた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了